長唄　外記猿

開曲は 1824 年ですが、その頃「外記節」の旋律が失われていたので、外記節の研究や知識をもとにして復活を試みた三作品のうちの一つです。外記節の愛好者は一般民衆、大衆ではなく知識階級の人々であった為に、品位、格調を重んじて構成されました。

つまりこの曲は外記節の「猿」で、猿曳きを描いています。行く先々のお屋敷の門を叩き猿回しを披露します。猿は山王の使いとも言われ、猿があれば馬が病気にかからないという言い伝えがあり、武家屋敷では馬の健康を願って猿を舞わせました。

まかりいでたる某はずんと気軽な風雅者　日がな一日小猿を背に背負からげてな　姿如法やなん投頭巾　夜さの泊りは何処が泊りぞ那波か名越か　室か泊りぞ　室が泊りぞ　泊りを急ぐ後ろより　小猿廻せや猿回し　おおいおおいと

招かれて　立ち帰りたる半町余り　玄関構えし門の内　所望所望の言葉の下

猿の小舞を始めけり　やんら目出度や目出度やな　君が齢は長生殿の　不老門

の御前を見れば　黄金の花が咲きや乱るる　咲きや乱るる　旦那の御前で

お辞儀をせ　ころりとせ　ころりやころりや　やっころりと　子持ち寝姿

お目にかけや　さっても粋な品者め　これは浪花にその名も高き　河原橋とや

油屋の一人娘におそめとて　いとけなきより手習いを　内の子飼いの久松と

共に学びのおこたらぬ　中をよそめの仇口に　さあ浮名の立つは絵双紙へ

苫を敷寝の楫枕　ひんだの踊りは一と踊り　皐月五月雨　苗代水に　裾や袂を

濡らしてしょんぼりしょんぼりと　植えい植えい早乙女　実に面白や踊るが

手元　辰巳午や春の小馬が　鼻を揃えて参りたり　猿に烏帽子を着せ参らせて

猿に烏帽子を着せ参らせて　勇む神馬の手綱取らしょう手綱取らしょう

のんほのいよえ　一の幣立て二の幣立て　猿は山王勝る目出度き目出度き

獅子と申すはすみすみすみすみすみすみ　住吉八幡　普賢文殊の召されたる

猿と獅子とは御しゅしょのもの　あれ音楽の声　諸法実相響き申せば

地より泉が増生して　天より宝が降り下る　なお千秋や万歳と　俵を重ね

面々に　楽しいなるこそ目出度けれ　楽しうなるこそ目出度けれ